

VI. 総 括

1. 東アジアにおける原の辻遺跡

原の辻遺跡は日本列島で最も多量の大陸・半島系遺物が出土しており、大陸・半島との関係抜きには理解することのできない遺跡である。ここでは、近年の調査・研究成果に基づき原の辻遺跡と東アジア世界との関係について整理する。

(1) 原の辻遺跡の成立

原の辻遺跡が集落として成立するのは、弥生時代前期末を前後する段階である。原の辻遺跡の成立については既に宮崎貴夫が縄文時代の遺跡と断絶している点から北部九州から壱岐へ移住によって成立し、その契機は半島から渡来する人々を受け入れる基地として条件整備をしたことに求められるという見解を提示している（宮崎 2001）。この見解が提示されて15年程度が経過したが、近年の研究からもこのことが強く支持されるように思われるので、より具体的にみてみたい。

1) 集落成立の人為性

壱岐島における縄文時代の遺跡は松崎遺跡、大柳遺跡、内野遺跡、鎌崎海岸遺跡・名切遺跡、馬立海岸遺跡など、西海岸の岩石海岸の潮間帯に多く位置する。縄文時代遺跡は内陸にも存在するが、そのほとんどは草創期の細石刃関係遺跡で、縄文時代早期以降の遺跡は基本的には海岸部に位置する。縄文時代晩期に入ると、大久保遺跡や堂崎遺跡など南東海岸の砂浜も利用されるようになり、遺跡立地がやや変化する。このほか壱岐島北端にある串山ミルメ浦遺跡でも夜臼式土器が出土したことがある。原の辻遺跡では縄文時代遺物も出土しているが、少量で、石鏃、石匙などの石器類が多く、土器は坂ノ下式土器が3または4片出土しているにすぎず、人々が定住していたとは考えにくい（古澤・田中 2014）。

その後の板付Ⅰ式段階の遺跡が壱岐島ではほとんど知られていない。そして、板付Ⅱb式期に至り原の辻遺跡に生活の痕跡が残されるようになる。このような点は宮崎の指摘のとおり、原の辻遺跡は前段階から人々の生活があって、発展することで成立した集落ではないと考えられる。

このように突然発生した集落はどのように形成されたのかについて遺跡立地の観点から考えてみる。縄文時代の遺跡は西海岸に多いとはいえ、岬や丘陵の陰を利用し、冷たい北西風をうまく避けることができるような箇所に遺跡が形成されている（古澤 2014）。縄文時代の遺跡は、住みやすい箇所に自然に形成された遺跡であるともいえる。これに対して、原の辻遺跡の立地する丘陵部および周辺低地部は現在でも「耳切りの辻」と呼ばれるほど、冬季には厳しい北西風が吹き込み、生活しやすい箇所というわけではない。しかし、そのような箇所であるにも関わらず、集落が形成されたことは、その立地について、住みにくいけれども、あえて選定したという点で、集落形成にあたっての人為性を看取することができる。原の辻遺跡の立地する深江田原平野には原の辻遺跡に良く似た低い舌状台地が何箇所もあり、原の辻遺跡の西方約300mにもそのような丘陵がある。しかし、ここでは、弥生時代の遺跡が確認されていない。単純に生業上の理由で平野部に集落を築いたとすれば、同様の立地に遺跡が分布してもおかしくないが、そうではない。ここにも集落形成の人為性をみることができる。

2) 集落成立の契機

集落が人為的に形成されたとすれば、その原因は何か。宮崎の指摘のとおり海外との交流が要因であった可能性は非常に高い。本書「大陸・半島系土器」の項で述べたとおり、原の辻遺跡で出土する最古の大陸・半島系土器は円形粘土帯土器である。そして、宮崎の見解が提示された時点では不條地区の旧河道における弥生前期末・中期初頭の土器と粘土帯土器との相伴関係が想定されていたが、本書でも検討したとおり、その後相伴事例が増加し、八反地区でも円形粘土帯土器と弥生時代前期末・中期初頭土器の相伴が確認されるに至った。

このようにみると、原の辻遺跡では集落が形成され、時間の経過とともに、韓半島と交流を持つようになったという状況ではなく、集落が形成された時点からほどなくして、既に韓半島との交流は行われていたということが了解される。そこで、先述の集落形成の人為性と併せて考えると、原の辻遺跡は韓半島との交流を目的の一つとして形成された集落であるという可能性が高いとみることができると。この場合、なぜ、居住不適な原の辻遺跡の丘陵が選択されたのかという問題にも一定の解決の道筋がみえてくる。原の辻遺跡を流れる幡鉾川が注ぐ内海湾は、湾口に青嶋、赤嶋といった島があり、外海が荒れていても、比較的穏やかなことで知られる。船待ちのできる内海湾への連結が容易で、なおかつ定住に必要な生産力が維持される平野部を持つ箇所、それこそが原の辻の丘陵ではなかったのかとも考えられる。

この交流の開始の背景には半島側での政治変動と青銅器や鉄器に対する倭人の需要の刺激があったとみる白井克也の重要な指摘があるが（白井 2001）、原の辻遺跡の集落形成地選定にはこのような要因も作用したのであろう。ただし、半島系土器が弥生土器を凌駕する量を占める地点は存在しないので、集落形成の目的のうちの一つであると捉えるべきであろう。

(2) 弥生時代前期末～中期の交流

既に指摘されてきたように粘土帯土器期に原の辻遺跡に持ち込まれた土器には、当時の韓半島で用いられていた器種全般がみられる。甕、長胴壺をはじめ、ミニチュア土器や今次の再整理でも報告した黒色長頸壺など祭祀色の強い土器に至るまで搬入されている。祭祀土器も含めた生活全般の土器が持ち込まれていることと、模倣土器も多く出土しているため、原の辻遺跡でも模倣土器が生産されたとみた場合、ある程度の期間、粘土帯土器文化人が滞在していたものとみられる。但し、粘土帯土器の出土密度が高い不條地区であっても、弥生土器が圧倒的に主体であるため、渡来人のみで構成される居住地があったというわけではない。

片岡宏二は日韓両岸で、互いに類似した模倣土器がみられることについて、一つの共通した土器製作技術に基づく概括化可能な土器様相を呈していると述べている（片岡 2001）。このような日韓で類似する模倣土器は円形粘土帯土器期には存在し、粘土帯土器人との接触開始後まもなく製作が開始されたものである。しかし、本書でも述べたとおり、彼我の類似と差異が複雑に交錯しており、一つの様式として認識するのは容易ではないようにも感じられる。むしろ、いろいろな面での模倣が許された土器群で、先・原史土器としてはかなり特殊な事例なのではないだろうか。土器の製作には通常、強い規制があるとみられるが、原の辻では、さまざまな要素を取り入れたり、模倣した土器が製作されたり、使用が許容されていることからみて、比較的規制の緩い、彼我の土器様式の緩衝地区として

一種の特区となっていたかもしれない。先・原史時代にあつてこのような規制の緩い土器の製作が許された状況というのはどのような状況であつたのか、研究の深化が望まれる。

粘土帯土器文化人が原の辻遺跡に来た理由は何であつたろうか。円形粘土帯土器期には政治的変動等により韓半島南部から北部九州へ移住があつたという見解（白井 2001, 李昌熙 2009, 川上 2012 など）が多くみられる。原の辻遺跡を移住の最終目的地とする可能性もないことはないだろうが、原の辻遺跡の墓地から、半島系土器が出土したことはなく、その可能性は小さい。しかし、九州本島への移住の中継地であつた可能性はある。それを示すと思われるのが、「大陸・半島系土器」の項で述べた原の辻遺跡出土擬粘土帯土器の中に、視覚により模倣可能な要素ではなく、粘土帯土器の流儀・癖を示す弥生土器を模倣した土器がみられることである。このような土器は、原の辻遺跡で初めて土器を作った人物によるものではなく、もともと粘土帯土器製作の流儀を身につけていた人物により、弥生土器を意識して製作したものである可能性が最も高い。当該土器が原の辻で製作されたものであつた場合、先・原史時代の土器製作が、女性によってなされたという一般的な理解を踏まえると、女性も渡来していた可能性が指摘できる。女性を含む集団が渡来したとなると、単なる交易だけが目的ではなく移住という可能性も考慮したほうがよい。

では、交易はなかつたかというところでもないようである。該期の居住域のある丘陵より南に位置する石田大原地区では弥生時代前期後葉以降、甕棺墓などが営まれているが、ここでは戦国式銅剣、トンボ玉、細形銅剣、多鈕細文鏡、天河石製白玉・勾玉などの渡来文物が出土している。石田大原地区では環濠内から半島系土器が出土することはあるが、墓域では半島系土器がほとんど出土することはない、甕棺からみても弥生人の墓地である。渡来文物の中でも貴重な物品が弥生人の手に渡り、副葬されているという状況からは交易も存在していたことは十分に考えられる。白井は弥生時代中期前半では日本列島で粘土帯土器が目立たず、靍島を舞台とする貿易がなされた一方、須玖Ⅱ式古段階には靍島貿易が終了し、代わって原の辻遺跡が中心となり遅い段階の三角形粘土帯土器が流入するという見解を提示したことがある（白井 2001）。しかし、原の辻遺跡の三角形粘土帯土器の共伴関係をみると須玖Ⅰ式段階の共伴例もあり、むしろ、須玖Ⅱ式段階での粘土帯土器の確実な共伴事例は多くないという状況になっている。加えて、参考となるのが、交流の現場となつたであろう船着き場である。船着き場跡では2条突帯鑄造鉄斧や粘土帯土器期の把手が出土しており、大陸由来の工法からみても大陸・半島色の強い遺構である。この船着き場の構築は、須玖Ⅰ式古段階頃であるとみられ、須玖Ⅱ式古段階頃までは利用されたとみられる。従つて、弥生時代前期末に開始された交流は原の辻遺跡では、弥生時代中期前半にも継続され、靍島遺跡も原の辻遺跡も同様に交流拠点となつていたのではないだろうか。そして原の辻遺跡では弥生時代中期後葉段階でも交易が継続するとみるべきであろう。

楽浪郡との関係については土器からは須玖Ⅱ式段階の滑石混和楽浪系土器の確実な共伴例も認められ、武末純一らの指摘（武末 2004）のとおり煮沸具がもたらされたとみると、須玖Ⅱ式段階には楽浪人の直接渡来が想定される。前漢五銖銭も楽浪郡との交流でもたらされたものである。須玖Ⅱ式段階より前段階の楽浪郡との関係を示す可能性がある資料としては、先述の戦国式銅剣、トンボ玉といった墓地出土品以外に、1998年度不條地区E区16号土坑では弥生時代中期初頭～前葉の土器、粘土帯土器に伴う組合式牛角把手付長胴壺とともに出土した三翼鎌が挙げられるが、粘土帯土器との共伴もあり、韓半島南部を経由した楽浪郡との交流であつた可能性もある。楽浪系筒坏を模倣したとみられ

る土器が弥生時代前期末～中期末の河川跡から出土していることは、粘土帯土器とともに、楽浪系土器の模倣も許容される「特区」であったことを示す。

交流は移住・交易に留まらず、弥生人の精神文化にも及んでいた。1995年高元地区調査における弥生時代中期後葉の9-B7号住居址で肩甲骨6点（内2点は確実に卜骨）の卜骨が発見されており、大陸由来の卜占が既に、受容されていたことがわかる。

(3) 弥生時代後期の交流

弥生時代後期になると三韓系瓦質土器と楽浪系土器の双方が原の辻遺跡に多く搬入されるようになる。三韓系土器の弥生時代中期における確実な共伴事例はまだ発見されておらず、大部分は弥生時代後期に併行するようである。楽浪系土器も滑石混和土器については弥生時代中期後葉共伴事例があるが、泥質土器については弥生時代中期共伴事例としては確実性に問題がある資料しかまだ発見されていない。そのため、楽浪系土器も多くは弥生時代後期に属するものであらうと考えられる。弥生時代中期末・後期初頭頃の大陸・半島系土器が相対的に少ないことは、原の辻遺跡における集落の再編と関係する可能性がある。

楽浪系土器と三韓系土器の分布は粘土帯土器とは異なる様相を示す。宮崎は、丘陵部に運搬具を中心とする器種が搬入されたとみて、粘土帯土器期の自炊生活から、丘陵内での饗応を受けるように変化したとみている（宮崎 2000, 2005）。宮崎の指摘のとおり丘陵内、特に北部の高元地区でも一定量の楽浪系土器、三韓系土器が出土している。そのため、丘陵が果たした役割も重要であるが、一方では低地部も交流の場だったのではないかと考えられる兆候がある。丘陵をめぐる環濠内から大陸・半島系土器が多く出土するため、投棄が丘陵側からなのか、低地側からなのか問題になるが、不條地区や八反地区では環濠の外側を流れる旧河川からも大陸・半島系土器が出土することからみて、弥生時代中期段階の船着き場は廃絶するものの、西側低地部では継続的に交流が行われていたとみるべきだろう。

楽浪系土器と三韓系土器でもやや分布が異なる部分があり、三韓系土器は丘陵の東西で同程度出土する一方、楽浪系土器は明確に西側で多く出土する。このように三韓系土器と楽浪系土器の分布が異なることは、三韓人が楽浪土器も携えて渡来したという状況ではなく、三韓系の集団と楽浪系の集団がそれぞれ別途渡来したという状況を示唆する。楽浪人の基本的な所持品であった中国貨幣の分布も西側低地に偏ることと併せて考えると、楽浪系集団と三韓系集団が丘陵内の東西、あるいは低地部の東西で、ある程度わかれていた可能性がある。

弥生時代中期では土器以外の渡来文物は墓地で出土することが多い。しかし、弥生時代後期以降では、墓地でも渡来文物が出土することはあるが、丘陵部や丘陵付近の低地部でも渡来文物が出土することが多くなる。特に八反・不條地区など西側低地部を中心に、土器溜や環濠、溝などの遺物集中部で、中国貨幣、ミニチュア車馬具、銅釧、木製櫛などの漢系文物が出土しており、交易によって得られたものとみられる。そのうち、土器溜出土品などは弥生人の手に渡った後、祭祀などに利用されたものとみられ、交易後の使用事例を示すものといえよう。

精神文化面では、弥生時代中期に引き続き1951年東亜考古学会高元地区調査で弥生時代後期後半に属する9点の卜骨が発見されている。また、1999年度八反地区1号土器溜（弥生中期中葉～後期末）

でも卜骨が出土している。注目されるのは2002年度調査石田高原地区環濠から出土した弥生時代後期中頃～後葉に属する龍線刻土器である。この土器は伏龍と昇龍が描かれ、その中間には雷文が描かれる。許慎『説文解字』〈永元12（紀元100）年〉には「龍 鱗蟲之長。能幽，能明，能細，能巨，能短，能長。春分而登天，秋分而潛淵。从肉，飛之形，童省聲。凡龍之屬皆从龍。」と記述され、龍は春分に天に登り、秋分に淵に潜む動物であった。土器に描かれた龍は昇龍と伏龍によってその生態が表現され、雷文は、天に昇る際の雷鳴表現であると解される（宮崎 2005）。この土器自体は弥生土器であるため弥生人の製作によるものであることは間違いないが、実際に生態を観察することのできない、大陸人の想像上の動物である龍の生態を把握し、かつ物語りを弥生人が正確に描いていることは、大陸・半島との交流が思想面、精神文化にまで深く及ぶものであったことを示している。

(4) 集落の終焉

古墳時代前期の遺構から陶質土器が出土するが、その分布は北部丘陵、丘陵西側低地、丘陵東側低地と分布が散漫になり、特段丘陵部に集中するという状況はみられなくなる。大陸・半島系土器の中でも最も遅い段階であるとみられる4世紀中葉の陶質土器が、丘陵から離れた安国寺前A地点で発見されたことも、丘陵部の求心力が既になくなってしまったことを示唆するのではないかと考えられる。

李昌熙2009「在来人と渡来人」『弥生時代の考古学2 弥生文化誕生』同成社

片岡宏二2001「海峡を往来する人と土器」『山中英彦先生退職記念論文集 勾玉』

川上洋一2012「九州出土の水石里式土器とその製作者集団に関する検討」『研究紀要』17, 由良大和古代文化研究協会

白井克也2001「勒島貿易と原の辻貿易」『弥生時代の交易』

武末純一2004「遺物からみた楽浪郡と北部九州の交流」『海を越えたメッセージ～楽浪交流展～』伊都国歴史博物館展示図録1

古澤義久2014「玄界灘島嶼域を中心にみた縄文時代日韓土器文化交流の性格」『東京大学考古学研究室研究紀要』28

古澤義久・田中聡一2014「縄文時代の原の辻遺跡」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』4

宮崎貴夫2000「原の辻遺跡の朝鮮半島系土器について」『原の辻ニュースレター』5

宮崎貴夫2001「原の辻遺跡における歴史的契機について」『西海考古』4

宮崎貴夫2005「土器」『原の辻遺跡 総集編Ⅰ』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第30集

2. 原の辻遺跡の盛衰

原の辻遺跡は弥生時代前期後葉に集落が形成され、古墳時代初頭に解体されるまでの約600年間栄えた「海の弥生都市」である。これまでの発掘調査成果をふまえ、集落の画期に注目しながらⅠ期～Ⅵ期の6段階に区分する。Ⅰ期は原の辻集落形成期〔弥生時代前期後葉～前期末〕、Ⅱ期は原の辻集落確立期〔弥生時代中期初頭～中期中葉〕、Ⅲ期は原の辻集落第1次盛行期〔弥生時代中期中葉～中期末〕、Ⅳ期は原の辻集落後退期〔弥生時代後期前葉〕、Ⅴ期は原の辻集落第2次盛行期〔弥生時代後期中葉～後期後葉〕、Ⅵ期は原の辻集落解体期〔古墳時代初頭〕にそれぞれ該当する。